

専門性を生かし、働き方改革につなげる教科担任制の推進

北広島市立北の台小学校 学級数 15 (校長 松原 康雄)

I はじめに

本校では、令和3年4月に、教科担任制の本格的な導入に向けて、保護者あてに文書を配付し、第3学年以上で教科担任制を実施することとした。また、第2学年においても、単元に応じて一部交換授業を実施することとした。

今年度は、昨年度の実施状況を踏まえ、第5・6学年において教科担任制を導入するとともに、第4学年以下は、多くの教科において単元に応じて交換授業を実施している。

II 実践の概要

1 専門性を生かした指導の充実

学年が上がることにより、高度化する指導内容について、学級担任をはじめとした教科指導の専門性をもった教員が担当することで、指導の充実を図っている。

2 教科担任の配置の工夫

令和3年度は、学級担任が専門とする教科を中心に、担当教科を決定した。高学年では、6年1組の学級担任が国語科を、6年2組の学級担任が算数科を担当し、第6学年の教科指導を実施した。中学年では、4年1組の学級担任が国語と理科、4年2組の学級担任が第3学年と第4学年の音楽科と図画工作科を担当するなど、学年の枠を越えた教科指導を実施することができた。

また、道徳科及び総合的な学習の時間については、主に学級担任が指導した。

令和4年度は、第5・6学年において、主幹教諭が理科、中学校の社会科担当教員が乗り入れ指導として第6学年社会科を担当するとともに、国語科及び算数科は、学級担任で分担した。

3 時間割の調整の工夫

中学年、高学年の2ブロックから各1名、時間割作成を担当する教員を位置付け、2学年4学級の時間割の調整を行っている。特別教室の割当てや学年行事、教科担任の予定、各教員の指導時数を一括管理し、毎週月曜日に各ブロックで点検・打合せを行うなど工夫して進めている。また時間割作成担当教員に対し、可能な限り、学年の分掌業務を割り当てないよう配慮している。

III 成果(○)と課題(●)

- 教科担任制を導入したことで、1日の中で、時間的な余裕を生み出すことができ、児童の家庭学習の取組を確認したり、学年・学級の事務的な業務や分掌業務をしたりする時間を確保することができた。
- 教科担任制の実施において、同じ教科の授業を複数の学級で担当したことにより、児童の実態を踏まえた教材研究の質が高まり、児童の資質・能力の育成に向けた授業改善を推進することができた。
- 学級担任だけでなく、複数の教員で様々な面から児童を観察することにより、児童生徒理解を深めることができた。
- 時間割の作成及び管理については、各行事や特別教室の割当て、教員の予定等を考慮しながら、6～8名の教員を配置するなど作業が多岐にわたることから、時間割の作成方法について、改善する必要がある。

R3教科担任制 (一部掲載)

高学年

6年1組担任 6年国語、5・6年音楽
 6年2組担任 6年算数、5・6年理科
 5年1組担任 5年算数、5年社会
 5年2組担任 5年国語、5・6年家庭
 中学校教諭 5・6年外国語
 (乗り入れ指導)
 主幹教諭 5・6年体育

中学年

4年1組担任 4年国語、4年理科
 4年2組担任 3・4年音楽、図工
 3年1組担任 3年体育
 3年2組担任 4年体育

【令和3年度教科担任制】

		28日(月)					
行事予定	児童会選挙 児童委員会						
	1	2	3	4	5	6	
5-1	算	体	総	国	行		
5-2	国	総	家	算	行		
6-1	国	音	理	算	行		
6-2	理	書	国	算	行		
体育	1		3	2	4		
音楽室	2		4	1	3		
理科室	3	3					
PC室	4	4			F		

【時間割管理表】

専門性を生かした教科担任制による指導 士別市立多寄小学校 学級数6（3）（校長 森 広明）

I 実践テーマの趣旨

本校では、令和3年度から「教科割り」という名称で、一部教科担任制を取り入れ、教員の専門性を生かすとともに、教員一人一人の指導時数を軽減し、児童と向き合う時間を確保しながら、中学校へのスムーズな接続を意図した取組を行っている。

II 実践の概要

1 教員の専門性を生かした指導による理科授業の質の向上

これまでは、学級担任が全ての教科を指導しており、複式学級の学級担任は、毎日2学年分の教材研究を行う必要があり、十分に教材研究を行うことができない状況が見られたことから、児童一人一人に十分な資質・能力を身に付けることが難しい場面もあった。

そこで、本校独自の「教科割り」を計画し、教科担任制を導入することで、一人一人が行う教材研究の時間を短縮することができるとともに、それぞれの教員の専門性を生かして系統的に指導できるようになり、授業の質が高まって、児童の資質・能力の向上につなげることができた。

特に、第3学年及び第6学年の理科について、学校体制を工夫し、教頭を含む教員が担当することにより、理科の複式授業を解消し、学年別による授業を成立させている。理科の授業は、観察、実験を行うことなどを通して問題を解決する過程の充実が大切であることから、学年別で指導することで、児童がじっくりと観察や実験に向き合う時間を確保するとともに、専門性の高い教員が他の学級担任にアドバイスすることで、学校全体の授業の質が高まっている。



【理科の実験の様子】

2 交換授業等による教員の負担軽減

今年度は、全学年の図画工作科、第5・6学年の家庭科、第3学年以上の外国語活動及び外国語科、一部の学級の音楽科、体育科において、専科指導を行っている。このことにより、下記のように、教員一人当たり週2～3時間程度の空き時間を生み出すことができ、教材研究や各種作業に充てる時間を生み出すことができるようになり、教員の負担軽減につながっている。

	専科教科	専科時数	担当専科時数	担当時数	差引(削減時数)	週平均	週時数	実質時数
教員A	図工	70	家庭科	60	-10	-0.3	26	25.7
教員B	図工・外	95			-95	-2.7	29	26.3
教員C	図・家・外	185			-185	-5.2	29	23.8
教員D	体・音・外	200	図工	120	-80	-2.8	28	25.2
教員E	図・家・体・音	245	外国語	105	-140	-4.0	29	25.0

3 複数の教員の目による情報共有と中学校への接続

本校の合い言葉として「一人の児童を全教職員が育てる」を掲げ、全校的な支援体制の確立に努めている。教科担任制は、一人一人の児童を複数の教員が指導することにより、児童の実態を多面的・多角的な視点から見取ることができ、学校全体で情報共有することができるとともに、児童にとっても複数の教員が関わることで、話しやすい教員を選択して相談することができている。

また、教科によって教員が異なることを経験している児童は、中学校の学習にも違和感なく取り組むことができ、中学校への接続にも有効な取組となっている。

III 実践の成果と課題

- 教科担任制の導入により、児童の学習内容の理解が一層深まるとともに、教員による児童の多面的・多角的な理解につながっている。
- 教員の負担軽減など、働き方改革につながっている。
- 校内人事での工夫のため、単年度ごとに計画を工夫する必要がある、複数年を見通した取組とするため、教育課程の改善を図る必要がある。

学校の組織力を高めるための教科担任制の取組

中標津町立中標津小学校 学級数 24 (校長 佐藤 玲子)

I 実践の趣旨

本校では、中1ギャップの解消、児童理解の充実、教員の専門性を生かした授業改善を目的として、高学年において、教科担任制を導入した。各学級担任が専門の教科の教科担任となり、外国語科は専科教員が担当している。組織的な取組の体制を整えることによって、学校の課題の解決を図っている。

II 実践の概要

1 「中1ギャップ」の解消に向けた取組

第6学年の児童が抱く中学校への不安の1つに「教える先生が変わること」が挙げられている。その不安解消の策の1つとして、第5・6学年において教科担任制を行っている。児童は、教科によって教室を移動したり、学級担任以外の教員から授業を受けたりすることにより、より多くの教員の授業に触れる機会が増えるようにした。

2 多面的・多角的な児童理解による学級・学年経営の充実

これまで、学級担任が全ての教科を指導していたことから、学級担任以外の教員が、児童の状況を把握することが難しく、学年として共通理解を図った指導や、組織的な取組が十分に進められていないという課題が見られた。そこで、高学年で教科担任制を導入したことで、学年の教員がその学年全ての児童と関わることができるようになり、学年として共通理解のもと、指導に当たることができるようになった。

また、初任段階教員が、学年主任の学級で授業を行うことで学級経営について学んだり、学年主任が初任段階教員の学級で授業を行うことで、児童の状況を把握して学年経営に生かすとともに、放課後の打合せ等で初任段階教員へ指導助言を行ったりするなど、多面的・多角的な児童理解により、学級・学年経営の充実に向けた取組が進められるようになった。

3 教職員の専門性を生かした授業改善

全国学力・学習状況調査の結果は、全国の平均正答率を下回る状況であり、教員の授業改善が喫緊の課題であった。そこで、高学年の教科担任制を導入したことにより、教科指導の専門性を高め、授業改善を図ることができた。

例えば、第5学年では、2名の学級担任が社会科と理科を分担しており、担当教科の授業準備に専念するとともに、同じ授業を2回行うため、自身の授業について振り返り、改善を図りながら授業を行った。また、第6学年では、2名の学級担任が社会科、家庭科、音楽科を分担しており、自身の専門性を生かした授業を実施し、互いに授業を見合い、視点を明確にして授業改善を図るようにした。



【第6学年社会科の授業】

III 実践の成果 (○) と課題 (●)

- 複数の教員で学年の全児童の指導に当たることにより、児童の状況について共通理解が図られ、組織的・計画的な学級・学年経営を図ることができた。
- 各学級担任が担当教科を分担することにより、担当教科の教材研究に専念できるなど、教育活動の質の向上に向けた働き方改革を進めることができた。
- 教員の専門性を生かした授業を行ったことにより、各教科等で育成する資質・能力を明確にした授業改善を進めることができた。
- 担当教科以外の授業時の児童の様子を把握することが難しいことから、放課後等に児童の様子について打合せを行うなど、各学年で一層の共通理解を図る必要がある。
- カリキュラム・マネジメントの充実に向けて、教員間の情報共有や時数の調整を図るなど、「共通・一貫・徹底・継続」した取組になるよう、組織体制を一層整備する必要がある。